聖杯を抱く騎士?　～蓮理の枝　比翼の鳥～

宝來りょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖杯を抱く騎士？　～蓮理の枝　比翼の鳥～

【Ｎコード】
Ｎ４２８５ＢＡ

【作者名】
宝來りょう

【あらすじ】
これは、「聖杯を抱く騎士　～Ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ　Ｌｏｖｅ～」の続きになります。
そちらを読んでからこちらを読んでくださることをお勧めします。
冬季合宿に出た緋奈は、自分の騎士・エティエンヌと連絡が取れなくなっていた。
彼に何かあったのでは？と探しまくる緋奈だが、合宿先でも大事件が起こって・・・・・。

今作は、夫婦の絆を題材にしております。

旅立ちは稲荷社から（前書き）

こんにちわ！　またまた宝來です。
この作品は、宝來の根気が続けば、全部で１２作になります。（だってトランプの絵札、全部で１２枚なんだもん）
読みどころは、“ゆらぎ”との戦いのほか、緋奈とエティエンヌのなかなか進まない恋愛だったりします。
お楽しみいただけたら嬉しいです。

今作も前書き、後書きは使用いたしませんが、感想、レビューは、３６５日２４時間、お待ちしています（笑）
でも、ヘタレなんでお手柔らかにね。

旅立ちは稲荷社から

「一日、千人殺しましょう、とは、また物騒ですね」
「はは、そうだね。
でもさ、イザナミは、それくらい見られたくなかったんじゃないかな、醜い自分をさ」
「そんなものでしょうか？」
「そんなもんだよ。女心は複雑なの。誰かさんにはわからないだろうけどね」
「ほお、女心ですか？」
エティエンヌは、あたしの胸のあたりをちらっと見て言った。
むかっ、あたしの胸が少しばかり淋しいからって女じゃないとでも言いたいわけ！？
「あんたね、女の価値は胸の大小じゃないんだからね」
「そんなことは、両手で胸を掴めるようになってから言ってください。今のままじゃ片手でも余ります」
「な、なんでそんなことわかるのよ！？」
「一目見ればそのくらいわかるでしょう」
「わからんわ！　このセクハラ男がっ！」
あたしは、エティエンヌを怒鳴りつけた。
またまた日本対フランスの戦争勃発である。
まぁ、あたしの狭いアパートの中だけという平和なものだけどね。

あれから、あたしとエティエンヌは、狐さんのお社から帰った後、仲良くお茶してたんだけど・・・・。
『それでね、十二月十三日から一週間、苦手科目の克服のための冬季合宿があるのよ。　あたしの場合は、英語とフランス語なんだけどさ』
と、あたしが言ったとたん、エティエンヌが手に持っていたバウ

ムクーヘンをぽとりと落とした。
『もう一度言ってもらえませんか？』
『だから、十二月十三日から一週間、冬季合宿があるんだってば！』
『いいえ、そこじゃなく・・・』
『英語とフランス語が苦手だから、それを勉強しに行くのよ』
『緋奈、あなた、まさか・・・・・。
フランス語が話せないというのでは？』
『・・・・話せないけど？』
何か問題でも？という目であたしがエティエンヌを見ると、雪男（イエティ）でも見るようにこっちを見ている騎士様と目があってしまった。
『そ、そんな・・・恥ずかしくないのですか？』
『いや、別に。日本人でフランス語をしゃべれる人、少ないもん。
選択でフランス語、選んだのもノリだったしなぁ～』
あたしは、エティエンヌが落としたバウムクーヘンを彼のお皿に戻してやりながら言った。
「緋奈、あなた、何、平然としてるんですか？
ふ、フランス語が話せないなんて大問題ではありませんか！」
エティエンヌってば、明日、日本が沈没するみたいに焦っちゃってる。
ああ、これだからうちの騎士様は・・・・・。
あたしは、ちょいちょいと手招きしてエティエンヌの頭を下げさせると、その形のいい頭を軽く叩いてやった。
『エティエンヌ、あたしはジャンヌじゃないって何度言ったらわかるの！
日本語が話せないってなら大問題だけど、フランス語はセンター試験科目じゃないし、話せなくても大した問題じゃないでしょうが！』
少し語調を強めて言ってやると、エティエンヌは、しまったという顔をした。
『はい、ですが、何故、語学が不得意なのに今の学校に？』

おおっ、そこをエティエンヌくんに突っ込まれるとは、お姉さん思わなかったわぁ～。
『得意なのは、国語と社会なの。一応、古代史の学者を目指してたしね。
えっと、今の学園を選んだのは、ただ制服が可愛かったからだったりして・・・・』
ついでに『えへっ』と可愛く付け足して言うと、向かいの騎士様は、めちゃくちゃわざとらしく頭をかかえた。
そして、アパート中に響き渡る声で言ったのだ。
『今日から英語とフランス語の特訓です！』と。

というわけでタダの家庭教師、もといエティエンヌの語学特訓は、なし崩しに始まった。そのお返しにあたしが、エティエンヌに日本神話のあれこれを教えてあげることにしたというわけ。何せ、これからも色んな神様と出会うわけだしね。
それで第一回目の今日は、イザナギとイザナミのお話。
「日本列島をお生みになったイザナギとイザナミの夫婦神は、その後、たくさんの神をお生みになるんだけど、イザナミ神は、火の神をお生みになったせいでお亡くなりになってしまうんだ。
妻が亡くなったのを悲しんだイザナギ神は、根の国（黄泉）までイザナミ神を迎えに行くんだけど、けして振り返ってはいけないと言われた妻を振り返ってしまう。
振り返った夫が見たのは、なんと膿み腐った妻。イザナギ神は、恐れ慄いて逃げ出してしまうの。
イザナミ神は、夫の裏切りがどうしても許せなくて『あなたの国民（くにたみ）を一日、千人殺しましょう』って永遠の呪いを吐く。だから人は、死ぬのが定めとなったってわけ」
あたしは、そう結び、そして、冒頭のエティエンヌの、
「一日、千人殺しましょう、とは、また物騒ですね」
に続くんだけど。

エティエンヌは、むっとしたままのあたしを宥めるように見た後、こう言ったの。
「男神は、その後、後悔したかもしれませんよ。驚いて逃げ帰ったもののどんなふうになろうとも自分の妻に変わりはなかったのにとね。
男というものは、概してあわてん坊な生き物ですから」
「・・・そうかもしれないね」
あたしは、そう答えながら、エティエンヌならきっと、恋人が膿んでいようと爛れていようと喜んで黄泉の国から連れ帰るだろうと考えていた。ジャンヌの転生を六百年も待ち続けた彼ならば。
「さて、次はフランス語のお勉強と行きましょうか？」
そう言いながらエティエンヌは、Ｂｌｕｅｓｔ ｂｌｕｅ ｉｎ ｂｌｕｅ（青の中の青）の瞳をきらりと光らせた。
こ、これは・・・ドＳが発動する時の目だ。
まずい、逃げなければ。
けれど、この狭い部屋に逃げ場などあるわけもなく、あたしのお腹がグーと音を立てる時間まできっついお勉強は続いたのだ。

「やっほー、お稲荷さん」
あたしは、早朝、冬季合宿に行く前、箭弓稲荷さんに挨拶に来ていた。
父さんみたいに心配性な狐さんを安心させるため、月曜の放課後、彼に会いに来ていたんだけど、来週は合宿先、姿を見せに来れないからね。
「ああ、行くんか？
確か、合宿やったな、行き先はどこや？」
少し太った感じのする狐さんが相変わらず賽銭箱の上にぷかぷか浮いている。彼の姿は、もちろんあたしにしか見えないものだ。
「長野県の諏訪だよ。

そこにうちの学園の保養所兼合宿所があるんだ」
「ほお、諏訪にか」
と、言った狐さんは、少し考え込み、
「まさか、お諏訪さんはないやろ！」と、言った。
「諏訪大社の建御名方命（たけみなかたのみこと）？　うん、ないよ。
あんなメジャーな神様が“ゆらぎ”に乗っ取られるわけないよ」
「そやな。お諏訪さんが乗っ取られるくらいならとうにわしが乗っ取られとるわな」
「それは、人間のあたしにはわかんないけどさ。
それより、お稲荷さん、太った？
甘いもんの食べすぎじゃないの？」
あたしがスイーツ男子の狐さんをからかって言うと、
「ちゃうわ、このどアホがっ！
少しばかり神格が上がったんや」
「そうなの？　それはおめでとうございます」
あたしは、仰々しく頭を下げる真似をした。
「・・・緋奈のおかげや。
貴船のんにも言われたろうが、緋奈に触れられると神力が増すんや」
そいえば、高淤さんに、『あんたに会ったら力が戻った』と言われたような。
でも、その割には、触るたび、すっごく嫌がられたけど。
「なんでだろ？」
「それは・・・たぶん・・・緋奈がわしらを好きやからや。
元々、神なんてもんは、人の思いの産物や。その思いが人一倍強いんやろ、あんさんは・・・」
と言うと、狐さんは、頬のあたりを赤くする。
白い狐が顔を赤くすると、萌え～と言いたくなるくらい可愛くて、あたしは、彼をぎゅっと抱きしめたいのを必死に我慢した。
「ってことは、お稲荷さんが太ったのは、あたしの愛の産物なんだ」

なるほどね。あたしが強い気持ちを抱いてるお稲荷さんは、姿が変わるほど影響があったというわけか。その仕組みはよくわからないけど、狐さんが喜んでるみたいなので、あたしもなんだか嬉しくなって言った。

「太ったんやない言うてるやろ！」

と、狐さんのいつものツッコミがでたところで。

「ははは・・・。

あたし、そろそろ行くよ」

と、笑ってごまかしたあたしは、狐さんの両手（両前足？）を取った。彼の力がより増すように祈りを込めて。

「ああ、チビ狐は持ったんか？」

「うん」

狐さんにもらったチビ狐は、“ゆらぎ”との戦いの時、壊れたかに思えたんだけど、ほんの少しも壊れていなかった。

もうあたしの危難を救ってくれないらしいけど、ＧＰＳみたいな役割をしてくれるというので、それからもずっと持ち続けている。

「もし、なんかあったら稲荷の神域でわしを呼ぶんやで。

すっ飛んで行くさかいな」

「うん。行ってきます、父さん・・・・」

そう挨拶して、真っ赤になった顔を見られたくなかったあたしは、すたすたと歩き始めた。後ろから狐父さんの声が追ってくる。

「ああ、ほんまに気をつけていくんやで、吾子・・・」

＊　吾子というのは、我が子という意味です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4285ba/

聖杯を抱く騎士?　～蓮理の枝　比翼の鳥～

2012年1月11日19時58分発行